ひと・まち・自然

トラまち Press

(財) 世田谷トラストまちづくり情報誌

Vol. 9
September 2012

特集

家をひらいて 地域の居場所に

それぞれの想いが育んだぬくもりの場

「私」と「地域」の間に グラデーションをもたらす「住み開き」

アサダワタル

せたがや散歩日和　第9回

まちなかのオアシスをめぐる

自然観察林～ふれあい農園～フラワーランド～
世田谷美術館～用賀プロムナード～用賀商店街～用賀駅へ

結び葉　第9回

田瀬裕水さん

訪れる人を喜ばせたい、ただその一心で花を植え続ける

お庭でお母さんと赤ちゃんが憩う「ルツの家」。みんなで見守る「子育ち」の場。

特集

家をひらいて地域の居場所に

今、地域の絆が見直されている。
まちに顔の見える関係が築ける場所があることは心強い。
空き家や空きスペース、いろいろなかたちで自分の住んでいる家をまちにひらく取り組み。
個性豊かな世田谷の「地域共生のいえ」を紹介する。

「あかねこうぼう」の「夏休み子ども工房」。子どもたちに手しごとの楽しさや温もりが伝わった。

みどり豊かな「読書空間みかも」。現在、「地域共生のいえ」としてもまちの人に親しまれ、愛されている。

まちへ「いえ」をひらくそれぞれの想い

夕暮れ時、まちを歩く。あちらこちらの家から夕食のいい匂い。灯りのともる窓辺から聞こえる子どもたちの笑い声。平和で幸せを感じるひととき。

大きな災害から学んだ私たちは、今、普通の暮らしのありがたさや、お互いに支えあうことの大切さを痛切に感じている。あらゆる場所で。あらゆるかたちで。

「地域共生のいえ」はそのひとつのかたち。きっかけはさまざま。まちに「いえ」をひらくことで、吹いている風もさまざま。それぞれの想いが育んだぬくもりの場所へと向った。

切妻屋根の平屋に「あばら屋春夏」の札がかかる。介護に携わる人のオアシスになっている。

ルツの家

みんなが見守る子育ては「実家」のような安心感

世田谷線松原駅を降りる。住宅地の中、聞こえてくる子どもたちの声。「ルツの家」だ。木戸を開けると、ヒメシャガの花が咲く土の庭で赤ちゃんとお母さんたちが集っている。裸足で土いじりをする赤ちゃんにヨチヨチ歩きの赤ちゃんがぶつかって尻もちをつく。笑い声とともに流れる穏やかな時間。リビングでは「人見知りするようになっちゃって…」「大丈夫。知恵がついている証拠」スタッフとお母さんのおしゃべりも弾む。庭もリビングも子連れで実家へ帰ってきたような、ゆったりとした安心感に包まれている。

泣いたり笑ったり。みんなと一緒に。

1.「赤ちゃんの声が聞こえるとほっとします」安原美世子さんの声が聞こえてきそうな庭の光景。2.家開きの日は表に看板が立つ。ベビーカーを置けるスペースがあるのが嬉しい。3.リビングで、思い思いの時をみんなで過ごす。

この「いえ」のオーナー、安原美世子さんは長くボランティア活動をしてきた人。自宅の1階を子育ての場に役立てることはできないかと思案していた時に、世田谷トラストまちづくりが、活動の場を求めていた人との結びつきのお手伝いをした。2008年に「ルツの家」としてオープン。世田谷区の「おでかけひろば事業」として「子育て支援グループamigo」が運営を担い、安原邸の1階部分と庭を週に3日開けている。

「ここは、赤ちゃんや小さな子どもたちを『放ち』、みんなの子どもをちょっとだけ遠くから見守る場所なんです」と、代表の石山恭子さん。安原さんと出会って、この家と出会って「私たちもまた育てていただいた」という。石山さんたちが寒い日に部屋に入ると、もう暖房が入れてある。奥の部屋にはソファもあり、授乳やオムツ替えにと使える。安原さんがそっと用意してくれているのだ。優しい「気づかい」に満ちた「いえ」。

「この家に出会えたことは奇跡のようなもの。ルールを作らなくても、禁止事項をあえてあげなくても、ふらりと来た親子がそんな『お互いさま』を感じて過ごしてくれればと願います」

何気ない気づかいを伝え、子どもの声が聞こえる日々を喜んだ安原さんだったが、2012年2月、天国へと旅立った。だがその遺志は息子さんが引き継ぎ、現在も同じかたちでひらくことができている。

2歳の子どもと赤ちゃんがいるお母さんは「広い公園に行くと、上の子はどこへ行くかわからないので、下の子はずっとおんぶしているしかないけれど、ここなら2人とも放せます」と笑う。みんなでみんなの子どもを親たちがゆるやかに見守っている。

「子どもたちは私たちの宝物。その宝物を大事に育んでいくために、この場が地域で育っていくことを願っています」

安原さんの願いが込められたこの言葉は、訪れる人の心に刻まれ育まれていっているようだ。

やわらかな光の中、テラスで主を待つ小さな椅子と小さな靴たち。

特集

家をひらいて地域の居場所に

あかねこうぼう

手しごとのぬくもりがつなぐ地域の笑顔工房

小田急線の祖師ケ谷大蔵の駅を降り、商店街の喧噪を抜ける。静かな住宅地の一画に「あかねこうぼう」の文字が見えてくる。手作りの掲示板には、近所の児童館の予定表も貼られている。

「こんにちはー」玄関を入ると「あらーようこそ」ととびきりの笑顔が迎えてくれた。オーナー、大嶋夕子さんだ。自身で織り上げたという藍染めの裂き織りベストを羽織っている。

室内には庭のみどりを通して柔らかな風と光が運ばれてくる。家の真ん中には、特注の機織り機。奥の食堂には大きなダイニングテーブルがあり、この日は着物を洋服に作り直す「リメイクの会」の活動日。型紙に線を引く皆さんは真剣そのもの。

大嶋さんは、30年のキャリアを持つ染織作家。ご両親が亡くなり、ご主人の転勤で長く暮らした三重県から実家のあるこの地へ戻り、家を新築。小さいながらギャラリーも設け、大好きな機織りをして静かに暮らす予定だった。

だが戻って2年目に、思いもよらないことが起こる。知人の工芸作家たちの展覧会を自宅ギャラリーで開催した時のことだ。口コミでたくさんの人がやってきた。訪れた人たちは口々に「こういう手しごとがしたい！」と大嶋さんに訴えたのだ。

「教えたい人と教わりたい人をつなぐのに、この家が何かお役に立つのであれば」そう思った大嶋さんは、世田谷トラストまちづくりに相談。運営体制や利用のルールなど最初のかたちを協議した。

こうして2010年に大嶋さんの自宅は「地域共生のいえ」としてスタートした。1年目は、大嶋さん自身、生活している場所をひらくことに慣れておらず、戸惑うことも多かったが運営協力者も集まり、パッチワークやちぎり絵をはじめ、「手しごとを楽しむ会」は次々とメニューを広げていった。

2年目は手しごとが得意な地域の高齢者を先生に、「夏休み子ども工房」を開く。4日間で延べ26名もの子どもたちが、目を輝かせて作品作りに没頭した。指導する大嶋さんたちは皆くたくた。けれど参加した親子から感謝の電話やファックスが届いた。先生役からは「疲れたけど本当に楽しかった。人に喜ばれるってこんなにうれしいことなんだ！」。大嶋さんと仲間がやりがいと確かな手応えを感じた瞬間でもあった。

そうして迎えた3年目。大嶋さんは自治会活動で出会った運営協力者のご主人に、「活動に参加してから女房が明るくなった。ありがとう」と、深々と頭を下げられた。頭を下げられるようなことは何もしていないと思うのと同時に、人の輪が広がって、思いがけないかたちで花を咲かせているような気がしたという。日々の暮らしの中から少し遠くなってしまった手しごとを通して、地域に笑顔を育てていくことが大嶋さんたちの役割なのだろう。

やわらかな風が頬をなでて通り過ぎていく。ふと見ると、鳥も庭先にやってきてさえずっている。居心地のよい場所に集まるのは人間だけではないようだ。

糸を紡ぐように人と人がつながっていく。

1.玄関・ギャラリーでの「マヤ展」。精緻で色鮮やかな織物は見ていて飽きない。2.入口には地域のお知らせも掲示。3.食堂のテーブルで型紙作り。4.機織り機と大嶋さん、様になる。

左／部屋のあちらこちらに世界の手織物が。これはグアテマラのマヤの暦。右／イギリスの小さな織り機。紐などを作る。童話の世界に登場しそうだ。

読書空間　みかも

「海軍さん」が暮らした家で本を介した新しいつながり

みどりに覆われた家の門には「読書空間みかも」と札が下がっている。自由が丘の駅から歩いてほんの5分。この家の玄関前に立つと、深い森の中の洋館を訪れているような気持ちになる。玄関ポーチを入る。天井の高い洋間にはゆっくりとした時間が流れている。ここでの読書は、とても贅沢なひとときだ。

かつてこの地域は「海軍村」と呼ばれ、海軍の将校クラスの人が居を構えていた。築90年近いこの家は、当時のまま現存する数少ない洋館。オーナーの黒井眞器さんはここで生まれ育ち、現在も隣接する棟で暮らしている。

この家を私設図書室「読書空間みかも」として運営し、駅前で古書店を営む町田恵美子さんにお話を伺った。

2005年、当時ブティックだったこの場所を知人と初めて訪れ、時を経たこの家に流れる柔らかな時間に魅かれた。「この場所を本を介して、人と人が交流できる場にしたいと、その時は軽く思っちゃったんです」開設当初を振り返って町田さんは笑う。けれど「自由が丘駅至近　買物便利」な物件。当然のことながらそれなりの家賃が発生する。「会員が100名集まれば大丈夫、なんてね。でも実際は難しいことでした」と、さらりと話す。

こうして「海軍さん」の家を借りて、地域にひらく動きは、2006年に船出となった。だが、このような活動は、活動費を捻出するのもままならないのもまた現実。まずはこの場所を人に知ってほしいという想いもあり、看板を取り付け、毎日開けることを心がけた。NPO法人「玉川まちづくりハウス」の協力も得て、一人、また一人と会員も増えていった。やがて絵本の読み聞かせを行うちいさな図書館、着付け教室、寄席なども開催するようになった。

2010年には、さらに地域にひらいていこうと「地域共生のいえ」に登録。その時、オーナーの黒井さんから、戦争中に焼夷弾を被弾したことや、戦後は家を焼け出された人たちが身を寄せて住んでいたことなど、この家の歴史を改めて聞くことができた。

黒井さんも「みかも」の活動に時々参加されることで、以前よりも元気になったという。さらに、地域の方に使ってもらえる場になるのであれば、と、家賃の値下げも申し出てくれた。町田さん一人では難しい船出だったが、協力者とともに6年かけてどうやら順調な航海になりつつあるようだ。

運営を手伝っている木村陽子さんは、ここで多世代の方から暮らしや子育ての体験が聞けたことで、自分の子育てが楽になったという。

長い年月、この地を見守ってきたこの家は、地域にひらくことで、オーナーも活動に参加する人々にも、それぞれに豊かな時間をもたらしているようだ。

長い歴史が醸し出す時間に魅せられて。

1.豊かなみどりに囲われた切妻屋根の木造洋館。2.玄関ポーチは、歴史を感じさせる洋風のデザイン。3.絵本の読みきかせ。子どもにも大人にも優しい時間が流れる。4.チェロ教室。チェロの音色にゆったりと包まれる。5.部屋を彩るスタンドと窓枠。優しい光が部屋に届く。

あばら屋　春夏

自宅介護の日々にティースプーン一杯の気分転換を

桜新町の駅前から5分ほど歩くと、住宅地の中に切妻屋根の一軒家が見えてくる。月に1度、第2火曜日の午前中、門扉に「あばら屋春夏」の札が掛かる。母親の介護に長く携わった安田宏子さんが、介護をしている方にほんのひとときを、息抜きに来ていただければと自宅をひらいているのだ。

2011年に世田谷トラストまちづくりと場のひらき方などを相談し、試行的に活動を行いながら、2012年3月にオープン。「地域共生のいえ」としてはまだ歩き始めたばかりだ。

活動を手伝っている陶山さんと池田さんは亡くなった安田さんのお母様のことを「おおせんせい」と呼ぶ。お母様は書道の「おおせんせい」。お2人は生徒さんだったそうだ。

「きっと開けても、誰も来ないと思ってたの」そう話していたという。だが予想はうれしいかたちで裏切られた。ご家族の介護をしている方たちが、一人、二人と「あばら屋」を訪れ、介護のあい間のひとときを過ごすようになったのだ。地域のケアマネージャーや「安心すこやかセンター」の職員も訪れ、早くも地域の介護の情報交換の場になりつつある。

「ここへ足を運ぶことが難しい介護中の方にも、独りぼっちじゃないですよと、ラブコールを発信しつづけたい」安田さんの言葉には、彼女がかつて体験した時間が垣間見える。

ふと見ると、陶山さんと池田さんが静かに微笑みながらお茶とお菓子を用意している。甘いものを食べてエネルギーを補給して。介護の日々にティースプーン1杯分だけでも気分転換をはかってほしい。誰かのほっとひと息つける場を「おおせんせい」の写真が穏やかに見守っていた。

ひとときの安らぎが大きな支えに。

1.3.和室でくつろぎ聞いたり話したり。2.「あばら屋」の札が掛かる開催日。4.チラシは安田さんの毛筆。

まちを支える縦糸や横糸に

「絆」という字は「糸」が「半分」と書く。私たちが持っている糸の半分はきっとどこかにつながっている。今回訪れた4軒の「いえ」にも、糸はつながっているかもしれない。

きっかけやかたちはさまざまでも、共通していたのは「私にできる範囲で」「これくらいならばできるかも」と「いえ」をひらいていることだった。

誰もが最初はとまどい、手探りだが、人とつながり、喜ばれることで特別な場所に変わっていくのはどこも同じだった。

一人ひとりの持っている糸は細いかもしれない。けれど糸の半分がつながって、縦糸と横糸が交わることでまちは強くなる。

「地域共生のいえ」は、新しい絆のかたちの可能性を私たちに示してくれている。

特集

家をひらいて地域の居場所に

地域共生のいえ

自己所有の家・建物を地域に役立てようとするオーナーを支援する財団独自の制度。
具体的には、専門家やNPOを派遣するなどして地域に役立つ活用イメージの検討、運営協力者の発掘、運営ルールづくりなど開設に向けた支援を段階的に行う。さらに開設後の活動PR、「いえ」同士の情報交換会の開催等も実施。現在区内に11軒の地域共生のいえが開設されている。

＊関心のある方は、下記までお問合せください。
☎03・6407・3313（地域共生のいえ担当）

「私」と「地域」の間にグラデーションをもたらす「住み開き」

アサダワタル［日常編集家］

「芸」として家を開く

僕が「家を開く」ということを提唱したそもそもの理由は、とても個人的なものでした。地域コミュニティの活性化や、無縁社会からの脱却などといった大きな問題意識以前に、自分にとって面白い「芸」の1パターンとして「家を開いてみればどう?」といったような、結構軽いノリから始まったのです。

「芸」と書いたのは、まず僕自身が音楽や文章などを作り出すフリーランスの表現者、すなわち「芸人」として生計を立てていることに起因します。そして、その芸の肥やしとして家を開き、お仕事なのかプライベートなのか、どっちなのかよくわからないその淡さを楽しみながら、様々な人たちと価値観を交換していく。そういうことを積み重ねていくことによって、他人に対する関心をどんどん膨らませていったのです。そしてその延長線上には、「自分の身近に住んでいる（あるいは働いている）、この街のあの人やこの人」にも関心が渡っていき、ここで改めて「地域」という意識へと導かれていきました。ここでは、こういった「私」の個人ごとの関心が、より他者へ、地域へと「公」に向かっていくそのプロセスについて書きます。

まず自分が楽しめること

世田谷にかぎらず、家を地域に開いているユニークな事例は、全国各地で見られます。僕は2008年10月にこのような取り組みを「住み開き」と勝手ながら名付け、その時から各地の家のご主人に、その暮らし方や開く上でのエピソードを伺ってきました。少なくとも現在の日本人の市民感覚からは、「家を他人に開く」ことに対して「なんでわざわざそんな大変なことするの!?」という疑問が噴き出してくるものだと思います。しかし、それをあえてやっている人たちがいるのも事実であり、そしてその多くの人たちは「慈善」である前に、「まず自分が楽しめる」という感覚をちゃんと大事にしているのです。無理をするだけではなく、自分もワクワクと楽しめる。その延長線上に地域の人や様々な人との出会いの場を継続しているのです。

そして、加えて大事なのは、そのことを、訪れた人たちが関心と敬意を持って理解すること。家はお店ではないし、ましてや公園のような誰でも自由に入れる公共空間ではありません。しかし、訪れる人たちが「ここはあくまでこのご主人の家なんだ」と認識しながら交流を楽しむことが、かえってその家の間口を広くすることに繋がり、結果的には誰でも入れる状況へ近づいていく。僕はそう考えています。その人が住んできた歴史があり、その人がこれまでどんなことに携わり、どういった価値観を大切にしてきたか。プライベートな空気感が溢れている場だからこそ、単に交流することだけが目的にならず、その人をまず「肴」にして、趣味のことや、子育てのこと、仕事のことや、街のことを語れるきっかけが、スムーズに生まれるのではないでしょうか。

関わる分野が多いほど、街のポテンシャルは上がる

僕が持っている芸のひとつ。それは「分野にこだわらず、どのコミュニティにも足を突っ込んでいく」といったもの。例えば、冒頭に音楽をしていると書きましたが、僕の芸の舞台はここ数年で、ライブハウスからカフェへ、商店街、福祉施設、小学校などと徐々に変化しつつあります。同時に、芸のあり方も演奏を聴いてもらうことから、一緒に演奏したり一緒に聴いて語り合ったりと、参加型になりつつあります。そして面白いことに、その芸の変化に伴ってお付き合いする人たちがどんどん変化していっていることです。

かつては特定の音楽ジャンルが好きなヘビーリスナーたちとコミュニティを形成し、そこに満足をしていたのですが、代わり映えのしないメンバーに徐々に閉塞感を感じ、カフェや街中の商店など、舞台の幅を広げたところ、今まで出会わなかったような客層と交わることができました。また、僕が運営に関わってきた大阪のcocoroomというNPOカフェは、大阪の下町の土地柄、商店街や日雇い労働者のおじさんたちなどとの交流も生まれ、彼らにとっても観たことのないライブを目の当たりにしてもらうなど、とにかくお互いのコミュニティ同士の化学反応が頻繁に発生するような現場でした。さらには、野宿生活をしながら活動する詩人や、車椅子の歌い手、家庭環境に問題を抱える中高生や、薬物依存の経験がある女性の方々、いろんな人たちと音楽を軸に繋がっていくことで、彼ら彼女らの背景に様々な縁（例えば支援団体、福祉施設職員、教員など）が存在することを知り、そしてさらに僕もその縁に加わっていくのです。

多様な人たちと日々会い交えることは、時に自分が当たり前のように過ごしてきた日常感覚を脅かされるようなリスクも背負います。しかし、そのリスク以上に人間一人ひとりが創造的になれる可能性に満ちています。こういった様々な人々と分け隔てなく出会う芸を磨くことの延長に、そんな出会いが自然と生まれる居場所をつくり上げる段階があるのだと思っています。そのひとつの方法として「住み開き」を実践する、そして地域の持つポテンシャルを、多様な人とのネットワークを通じて表現していく。「この街にはこんなことができる人も、こんな面白い活動をしている人もいるんだよ!」と。そう言われる街は、とても魅力的で住んでみたい街だなぁと思います。

継続できる仕組みがあればなおよい

最後に、これらを支える制度の必要性について。「地域共生のいえ」という世田谷の先駆的な制度に続き、いま兵庫県西宮市で「つどいの場オーナー登録制度」が始まりつつあります。これは地域につどいの場をつくろうと考えるオーナーの「住み開き」をサポートするような仕組みですが、ここで何よりも大事にされていることが「オーナー自身の想いや希望」であることは特筆すべきことです。まさに「住み開き」は「まず自分が楽しめること」が本当に大切なのです。その上で、オーナーに対する相談・支援を行うまちづくりコーディネーターの存在があり、そして行政はコーディネーターへの地域情報の提供や資金提供などを行うのです。こういった制度をつくることの重要性は、オーナーの「私」の想いを、「自分ごと」から「社会ごと」へと向かわせ、なおかつそこに継続性をもたらせることにあります。この「私」から「公」への意識の跳躍を支え続けるためには、行政は「支援」という意識から脱却するべきです。官民がお互いの地域に対する意識を高め合い、スキルを共有しあうパートナーでなければなりません。真にパートナーになれた時に、行政は実験的で先駆的な事例を躊躇なくつくることができ、かつ、そのことによってまた市民感覚も変わっていく、そういった好循環が生まれるのですから。

撮影:佐々木遊

アサダワタル ASADA.Wataru
1979年大阪生まれ。「日常再編集」をコンセプトに、音楽と執筆とコミュニティ演出を軸に活動。各地で演奏とCDリリース、音楽を使ったコミュニティワークショップを展開しつつ、ユニットSJQ(HEADZ)ではドラムを担当。
著書に『住み開き 家から始めるコミュニティ』(筑摩書房)、『編集進化論 editするのは誰か?』『クリエイティブ・コミュニティ・デザイン』(共にフィルムアート社、共著)など。
神戸女学院非常勤講師、NPOcocoroom副代表理事。

まちなかのオアシスをめぐる

自然観察林～ふれあい農園～フラワーランド～世田谷美術館～用賀プロムナード～用賀商店街～用賀駅へ

高速道路や環状八号線、駅前のタワーなど、すっかり開発が進んだイメージが強い用賀。
しかし歩いてみれば、まちのなかに私たちが癒されるスポットが点在している。
今回の案内人は、世田谷トラストまちづくり職員の小出仁志さん。
約2時間の散歩で、疲れた頭と心にエネルギーをチャージしてはいかがだろう。

せたがや 散歩日和 第9回

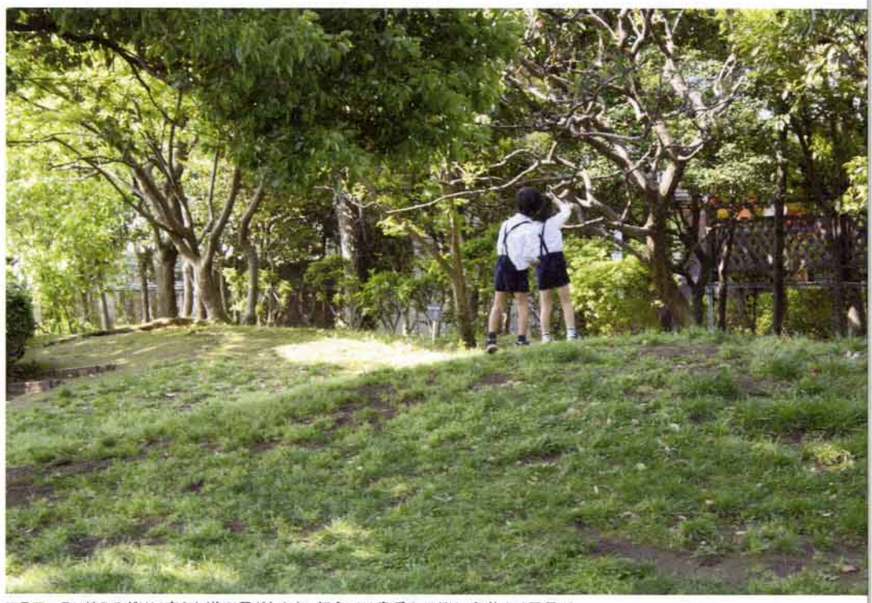
生まれ変わった屋敷林
用賀駅南口から自然観察林へ

用賀駅南口に構える、高速道路の高架の柱たち。車のエンジン音が響き渡るこのまちに潜むというオアシスに、期待は膨らむ。行き交う車の喧噪に負けじと、足音も高らかに出発した。

「このあたりも昔は戸建て住宅が並んでいたのですが、今ではマンションばかりです」

感慨深げに話すのは、今回の案内人である小出仁志さん。貴重な自然を守りつつ、世田谷の変遷をひたすら見つめてきた。だからこそ、小出さんは、区内のありとあらゆるみどりを熟知している。

住宅街に入り少し歩くと、左手にうっそうと葉を繁らせる林が見えてきた。「自然観察林（*）」だ。中で落ち葉を掃く人にひと声掛け、門扉をくぐる。見回すとケヤキやシラカシなど、様々な樹木がみられる。広さ約3000㎡の敷地内では、林で出た落ち葉を区内の公園や寺社から集めてきた落ち葉とともに寝かせ、腐葉土を作っている。できた腐葉土は区内の公園で再利用されるほか、プランターに入れ花を育て、配布もしているそうだ。作業を行うのは、主に障害を持った区内の方たち。にこやかに作業する光景がとても和やかだ。実はこの丹精こめてつくられた腐葉土の中では、カブトムシの幼虫たちが身を肥やしている。夏になると林ではたくさんの成虫を観察することができるのだろう。響き渡るであろう子どもたちの賑やかな声を想像しつつ、林を後にした。


フラワーランドのみどりに守られ遊ぶ子どもたち。都心では貴重なみどり。心休まる風景だ。

上／自然観察林。屋敷林の名残であるシラカシに守られている。下／ふかふかの腐葉土は、幼虫たちの極上のベッド。

*自然観察林
開園日:平日10～16時／休園日:土日祝・年末年始

農作物と花に触れる時間
ふれあい農園からフラワーランドへ

道中佇むお地蔵さんやブドウ畑を見やりながら進む。

「世田谷には、畑や果樹林などの生産緑地が多いんです」と小出さん。ちいさなみどりも、立派なオアシスだ。ケヤキの小道を抜けると、広々とした畑が現れた。この一画に、イチゴを栽培している「ふれあい農園」がある。

「農園で実ったイチゴは事前申し込み制で収穫できます。区民の方に実際に土に触れてもらう良い機会ですよね」

小出さんの話に耳を傾けていると、この畑の持ち主である大塚信美さんがやって来た。大塚さんは代々続く専業農家の10代目だそうだ。大塚さんのご厚意に甘え、真っ赤に完熟した実を口に入れる。かぐわしい香りと程よい酸味。イチゴ本来の味を実感する。

「作物の旬を味わえるように心がけています。肥料には、馬事公苑の馬糞が大活躍！」

大塚さんの愛情、それがおいしさのなによりの秘訣だ。

イチゴに後ろ髪を引かれつつ生垣の続く路地を進むと、ベニバナトチノキの大木が目に入った。「フラワーランド」だ。正式名称は区立瀬田農業公園といい、1986年に「花づくりのできる公園」として誕生したという。こちらでは地域単位で花づくりができる人を育てるために、定期的に園芸教室が開かれるそうだ。そして、その卒業生の有志により結成されたフラワーランド友の会のボランティアが、宿根草やバラ、山野草などの花壇の維持管理をしている。

「ここでは環境にやさしい花づくりを心がけています。人々が憩う場所にできるだけ農薬は使いたくないですよね」

小出さんの言葉から強い想いが伝わる。害虫対策にはトウガラシやニンニクの抽出液や木酢液などを使い、腐葉土は先に訪ねた自然観察林や園内で作ったものを使用している。園内ではせせらぎの音が聞こえ、人々はそれぞれ花を愛で、ゆっくりと時を過ごしている。吹き抜ける風は草花の香りに満ち、深呼吸すると身体の芯から日頃の雑念が取り除かれていった。

1.ふれあい農園。人々が絶え間なく訪れ、収穫作業を楽しむ。2.トマトなど様々な野菜が伸びやかに育つ畑。3.鈴なりのイチゴが太陽のもと、宝石のように輝く。4.都市農業に、真摯な姿勢で取り組む大塚信美さん。5.フラワーランド入口。花壇が目を惹く。6.愛情をいっぱい受けて育つ苗。

都立砧公園
【とりつきぬたこうえん】

写真提供:世田谷区

砧ファミリーパーク開園式

1940年、当時の東京府が設置を決定した6ヵ所（神代、水元、石神井など）の大緑地のひとつ。設置の際は、緑地保全、都市の無制限の膨張を防ぐため、東京の外周に沿って環状の緑地とした。戦時中は、防空緑地としての機能を持ち、食糧増産のため面積の約6割が畑となる時期もあった。高度成長期は都営ゴルフ場にもなり、使用料も低廉で人気があった。

東急田園都市線用賀駅
【とうきゅうでんえんとしせんようがえき】

用賀という地名は、鎌倉初期に勢田郷にユガ（梵語）道場があったことから付いたとも言われている。当時は、そのほとんどが山林と畑地だった。1907年に玉川電気鉄道の開業とともに用賀駅がつくられ、その後1969年に玉川線は廃止された。当時計画されていた玉川線車両基地の予定地は、1993年に28階建ての高層棟を中心としたオフィスビルとなった。

みんなでつくるみんなの場

世田谷美術館から用賀プロムナードへ

フラワーランドを後にして、高速用賀インターの下をくぐり抜ける。心身ともに洗われた後では、少しくらいの騒音など気にならない。滑らかに歩を進め、砧公園に辿り着く。そこで聞いた小出さんの言葉に耳を疑った。

「実は昭和30年から10年間、ここはゴルフ場でした」

砧公園の過去を知り、改めて世田谷の凄まじい変貌ぶりを再認識する。木漏れ日の優しい道を進むと、「世田谷美術館」に到着した。昨年、空調や配管設備を入れ替えるなどの改修工事が行われ、今年の3月末にリオープンした。ライブラリーでは、美術をより身近に感じられるような情報が入手でき、新設されたカフェではフランスの郷土料理であるガレットをゆっくり味わうことができる。

ふと、美術館の背後に伸びる煙突に目が止まった。空色を基調に雲のようなユニークな模様が描かれている。高さ100mというこの世田谷清掃工場の煙突の模様は、1988年に全国から公募して選ばれたものだ。この煙突色彩コンペは、都市美について人々に関心を持ってもらおうとの想いから実施されたもので、完成した煙突は今や世田谷のランドマークとしてすっかり親しまれている。

公園を抜け、交通量の多い環状八号線を越える。砧公園のちょうど向かい側にあるのが、「上用賀五丁目いらか道市民緑地」だ。こちらは、民有地のみどりを守るために世田谷トラストまちづくりがオーナーと契約し、一般公開している。庭木として馴染み深い樹木が植えられ、咲く花や紅葉から四季を感じることができる。車椅子用スロープも完備された人に優しい空間だ。

市民緑地を出て、すぐ脇に鎮座するは、ふたつの鬼瓦。その間を抜ければ、敷き詰められた瓦の感触が足に心地良い。ここから約1㎞、市民緑地の名の起源ともなった通称・いらか道、「用賀プロムナード」が伸びている。昔はここが大山街道だったことから、舗装には日本の伝統素材である淡路瓦が使用され、かつての水路を再現した水の流れや波紋の文様や百人一首が刻まれている。なるほど、歌を詠みながら辿っていけば、美術館への道のりの長さをつゆとも感じさせない。道中のオブジェも、道行く人の目を魅きつける。ちなみにこちらは歩車共存道路。このような道のつくり方によって車の速度を抑え、車と歩行者が共存可能な道づくりを目指したのだ。こういった道は全国でも類いまれな存在だそうだ。

1.木々の落とす陰影が、人々を憩わせる砧公園。2.清掃工場煙突と世田谷美術館のある風景。不思議な一体感。3.上用賀五丁目いらか道市民緑地。環八沿いの絶好の休憩スポット。4.入口の鬼瓦が、用賀プロムナードを見守る。5.いぶし銀の瓦の表面とみどりの対比が美しい。6.作り手の遊び心がつまった椅子。

右／夏には水の流れが子どもたちの五感を刺激する。左／道すがら、一から百まで歌を辿る。歩くのが楽しい、仕掛けに富んだ道。

変化が紡ぐ人々の心

用賀商店街から用賀駅へ

いらか道をそれ、路地へと入る。にわかに商店が増え、人々の営みの気配が色濃く漂う。こちらは、約260軒もの店が立ち並ぶ「用賀商店街」だ。暮らしを支える様々な店が、通常の商店街のように1本の通りに納まることなく、碁盤目状に広範囲に立ち並んでいるのが特徴だ。

この一画に、入口のピンクのサル、商店街のマスコットのヨッキーが目印の「まちのステーション ハロー＊ようが」がある。トイレ、授乳室を完備し、喫茶はもちろん、商店街のイベントにも対応する多目的スペースだ。商店街の活性化を図る商店街組合役員理事の杉本浩一さんにお会いできた。商店街では、お得なクーポンがついた情報誌を無料配布している。また、商店街主催で、まちあるきツアーなどを随時開催、最近では、用賀神社の集会施設を借りて開くヨガの講座も地域の人々に大好評だ。商店街内の全国の物産を扱うアンテナショップ「田舎のごっつお」では、陸前高田の産物も取扱い、震災の復興に貢献しているという。これからもこの商店街は、人々の手を賑やかに繋げていくに違いない。

商店街を抜け、夕刻の用賀駅前に立ち、タワーを仰ぐ。

「ここは以前、玉電の車両基地になるはずの空地でした」

話す小出さんの足もとには、古代ローマの野外劇場風の階段が駅へと続いている。この風景もまた、人々の心のなかに強く残されていくのだろう。

この世の中に変わらないものなど、なにひとつとしてない。世田谷で暮らす人々は、柔軟な心と体で新しい変化を受け入れていく。それが絶えることなく続いていく限り、これからもこのまちのオアシスの泉が枯れることはないだろう。タワーに一筋の夕日が反射し、きらりと美しく輝いた。

上／ハロー＊ようが。ヨッキーはまちの人気者。下／人々を送り、また迎える用賀駅。人の流れを計算したデザイン。

用賀プロムナード

【ようがぷろむなーど】

1986年、砧公園内の区立美術館の開園にあわせ、用賀駅北口から美術館までの最短ルートを遊歩道として整備した。特徴的なのは西側500mに及ぶ「いらか道」。瓦を、ベンチ・街路灯・オブジェ・樹名板などあらゆるものに使っている。また、既設の水路を暗渠化し、その一部には新しく水の流れを造り、かつての川の面影を見ることができる。

写真提供:世田谷区

用賀プロムナード開通式

世田谷清掃工場の煙突コンペ

【せたがやせいそうこうじょうのえんとつこんぺ】

1987年、世田谷清掃工場煙突の建て替え計画が持ちあがった当時、清掃工場の煙突といえば、赤白の縞模様が当たり前だった。砧公園をはじめ、遠くから見渡すことのできる煙突を地域の景観に配慮した色彩にするために、世田谷区が煙突の模様を全国から公募。1,040点、4歳から85歳まで幅広い年代からユニークな作品が集まった。

写真提供:世田谷区

応募作品の数々

ふれあい農園

【ふれあいのうえん】

世田谷区民に区内農園における収穫体験の機会を提供し、都市農業への理解を深めることを目的とした区の取り組みである。都市における農業経営の安定化を図る側面もある。秋から冬にかけては、リンゴ、クリ、ミカンなどの果樹、サツマイモ、ダイコンなど野菜の収穫を体験できる。＊天候不順などで実施しない場合もあります。

[お問合せ:世田谷区都市農業課3411-6658]

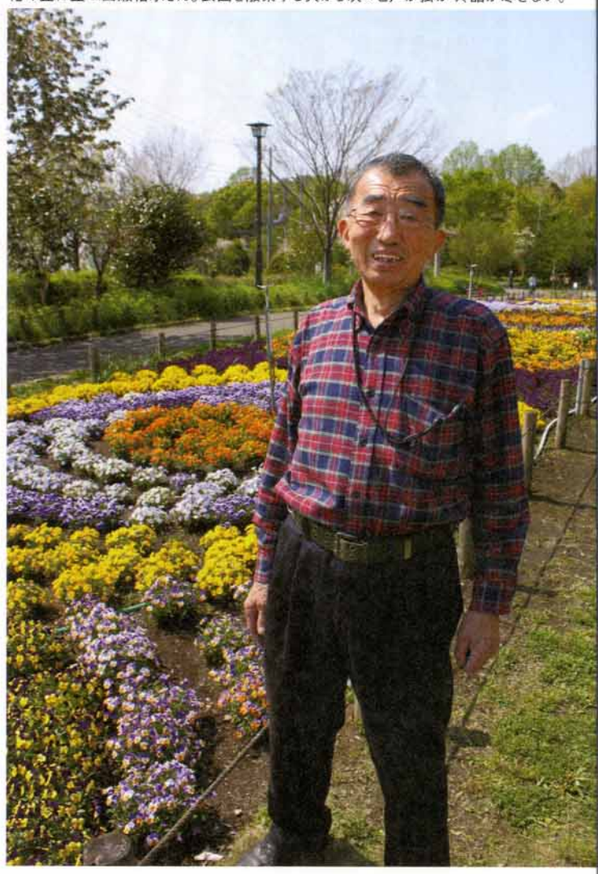
手から手へ 人から人へ 結び葉

第9回

訪れる人を喜ばせたい、ただその一心で花を植え続ける

田瀬（たせ） 裕水（ひろみ）さん

花の丘に立つ田瀬裕水さん。公園を散策する人から次々と声が掛かり、話が尽きない。



元気があるまちには、人と人をつなぐ「結び葉」のような住民が必ずいる。芦花公園花の丘友の会理事長、成城交通安全協会常任理事など、多くの役職を兼務し、その人脈を活かし、老いも若きも、とにかく楽しめる公園づくりに取り組む田瀬裕水さんに登場していただいた。

人々が平和に憩う花いっぱいの丘

蘆花恒春園の一画にある花の丘。その花壇では、パンジー、ネモフィラ、ノースポールなど、色とりどりの花々が見目麗しく咲き誇っている。周囲では子どもたちが戯れ、散歩途中の人々がベンチで足を休める。付近をモンシロチョウがひらひらと舞うその光景は、平和、それ以外のなにものでもない。通りを挟んで向かい側、そこに建つ一軒家の2階から満足そうにその様子を眺めるひとりの男性がいる。

彼の名は、田瀬裕水さん。この花壇をつくるボランティア団体、「芦花公園花の丘友の会」の理事長だ。花の丘友の会は、約2000㎡の5つの花壇の運営と管理をしている。そのなかの4つの花壇は近所の芦花小学校と千歳台小学校に花を育てる場として提供し、子どもたちが球根や種を植えているそうだ。中央の一番大きな花壇は、友の会のボランティア40名ほどが毎週日曜日に集まり、季節ごとに花の苗を用意し植え替えている。

人脈と信頼が繋いだ「公園改革」

とにもかくにも、田瀬さんの肩書は多い。そしてその人脈の多さは、彼への信頼の強さを物語っている。なにしろ田瀬さんが地元・粕谷に住みはじめたのは1959年のこと。田瀬さんはここで運送業を営みながら暮らし、地域の人々と交わりながらまちの移り変わりを第一線で見つめてきたのだ。

1995年、都が蘆花恒春園の拡張整備の一環として、公園南側の土地を買い取り、樹林公園をつくる計画が持ちあがった。当時、粕谷商店街副会長を務めていた田瀬さんは、樹林公園よりも明るく華やかな花の名所になったほうがよいと考え、翌年、商店街としての要望書を都に提出した。その要望は見事受理され、それを機会に地域の住民グループを結成、花の丘の設計段階から公園づくりに携わることになる。活動のしやすさを考えNPO法人格を取得した後、公益信託世田谷まちづくりファンドを利用して花の丘の花壇や遊歩道の花壇づくりに取りかかった。その間も、より多くの人に訪れてほしいという想いから、新聞やテレビなどのメディアにチラシを配り、メンバーとともに広報活動を進めたという。

2006年には、花壇にたくさん飛んでくる赤トンボのために、という発想から「とんぼ池」を設置。さらに2年後には、世田谷まちづくりファンド「まちを元気にする拠点づくり部門」の助成を受けて、とんぼ池の観察小屋となる「やごの楽校」もつくった。水生動物の観察会が開催される毎月第4土曜日、子どもたちと一緒に組み立てたログハウスからは、好奇心に満ち溢れた歓声が沸き上がる。

感謝の気持ちが生む心からのおもてなし

花の丘ではもちつき大会に始まり、七夕、ハロウィン、クリスマスなどほぼ月1回のペースで様々な趣向のイベントが開かれ、それを楽しみにしている地域の人がたくさんいる。特に10月に行われる焼きいも大会では、花の丘で咲き終わったヒマワリやコスモスの茎などを燃やした焚火でつくった焼きいもを来場者へ無料配布し、毎年好評を博している。

「みんなが集まってくれること、それこそがありがたい」

田瀬さんはそう言う。なかでも、4月のタカトウコヒガンザクラまつりでは、約2万5000人もの人々が区内外から集まるそうだ。これも地道で熱心な活動と来場者に対する感謝の気持ちがあってこそのことなのだろう。あれやこれやのもてなしに、帰る時には皆にこやかに公園を後にし、また再び、花の丘を訪れてくれるという。

「花壇をきれいにしたい、区民の癒しの場所にしてもらいたい、ただただそんな気持ちで花を植えています」

蘆花恒春園がいつでも花と人々の笑顔で満ちていて欲しいと願う田瀬さんは、その維持のために常日頃からアンテナを張り続けているという。ボランティアとして自分たちの足でしっかりと立ち、活動していくために、花の丘の苗の費用は企業の助成金や都市緑化基金などを積極的に利用している。また、世田谷区の生涯現役プロジェクトに参画し、退職後何をしようか迷う団塊世代に呼びかけ、会の一員にもなってもらった。最初はまったく知識や経験がなかった人たちも、楽しみながらボランティアに取り組むことができる友の会の活動にすっかり馴染み、活動日を心待ちにしているという。

実は田瀬さん、まだまだ胸のなかには公園に対する密かな野望が秘められているようだ。パワフルに活動する田瀬さんの元気の秘訣を聞いてみると、競技ダンス、海外旅行……田瀬さんの趣味は実に幅広い。公園を変えていこうと様々な提案を続ける姿は、彼の強い好奇心、そして何事も心の底から楽しんでしまう自由でおおらかな精神そのものにほかならない。

「そろそろ雑草を取らなきゃね」

そうつぶやきながら草刈り機を手に、田瀬さんは今日もいそいそと、彼の人生を楽しくさせる「庭」へと向かう。

1.花の丘の花壇。色の調和が人々の心を潤す。2.トンボ池に臨む、やごの楽校。3.子どもたちが丹精込めて咲かせた花。生きものに手をかけた分、育つことを学ぶ。4.花の丘の前では皆足を止め、しばし休憩。5.毎月のイベントは、季節の伝統行事を風化させず後世に伝える役割も果たす。

結び葉 column

【タカトウコヒガンザクラ】

長野県高遠町固有の品種で、県の天然記念物の指定を受けているタカトウコヒガンザクラは、花の丘に15本植えられている。計画時、園のシンボルになるような希少なサクラを植えたいという地域住民の想いを寄贈依頼文書にして高遠町に提出したところ、原則として門外不出である苗が特別に贈られた。この厚意に対し、東京都から感謝状を贈るとともに、樹木の管理に十分な配慮を行っている。可憐な花は、都内では蘆花恒春園のほか、新宿中央公園や新宿御苑などで愛でることができる。

子どものページ

川の生きものの夏編

子ども生きもの探検隊

今ちゃん先生、今田裕実子さんと行くある日の野川

みんながいつも散歩したり遊んだりしている場所にはたくさんの生きものたちがくらしているんだ！
今回は、野川で、今ちゃん先生が、生きもの発見のコツを教えます。
メダカ、ナマズ、ハグロトンボにも出会えるかも！
さぁ！みんなも家族や友だちとさがしに行こう！

準備

コツその❶
川岸のえぐれたところや、水面が植物におおわれているところを見つけたら、あみを足もとにしっかりつけ、足で石のあいだやどろの中の生きものをかきだすように、あみに流しこもう！

川の生きものさがしは短い時間が勝負。あみを下流におくのがポイント！

これで準備バッチリ！

つかまえた生きものが呼吸しやすいように まず、ふくろをよくふって 水に空気を 入れておいてね！

今ちゃん先生の七つ道具

- 生きものをかんさつする「バット」
- 生きものをつかまえる「あみ」
- 小さな生きものを見る「ルーペ」
- 生きものを入れる「ケース」
- みつけた生きものを記ろくする「ノート」
- 小さな生きものをはさむ「ピンセット」
- 「ながぐつ」

ぼうしもわすれずにね！

わんど

コツその❷
川の流れがゆるやかで、入り江や池のようになっているところ（わんど）は生きものたちも住みやすいんだ。そっと近づいてみよう！

たくさんとるぞ～！

今日イチバンの大物 ナ・マ・ズ

メダカのオス・メスの見わけかた知ってる？

せびれに切れこみがあるのがオスだよ！

うわ～、ナマズの口の中は白っぽいね！

ナマズの赤ちゃん

アメリカザリガニ

メダカ

川岸

コツその❸
川岸の木や草の下は、生きものにとって大切なかくれ場所。生きものにとってすずしそうなところもポイント！

ハグロトンボのオスは胴がメタリックグリーン色！みんなも探検してみて！

コツその❹
水草など根が水の中にある植物の近くではハグロトンボのヤゴをさがしてみて！岸のしげみもチェック。成虫が飛んでいるかも！

ハグロトンボ羽が黒くてカッコイイな!!

ミナミヌマエビ

モツゴ

ハグロトンボ

ハグロトンボのヤゴ

[注意] 川の水は、雨が降ると急に増えることがあるので、周辺、上流の天気にも注意しよう！川にはひとりで遊びに行かず、おうちの人にも必ず言ってから行こう！

トラまち topics

トラストまちづくり課の上半期（2012年4月から2012年8月まで）のトピックスをご紹介します。

11カ所目となる「市民緑地」が北烏山に誕生しました

寺町通りを抜けた高源院の裏手に、「北烏山四丁目梅林市民緑地」が誕生しました。40年経った梅林で、古くなり枯れたウメは整理し、新しいウメやカキ、クリなど、実を楽しめる樹木を補植しました。梅林の風情を感じつつ、花と実と香りを楽しめる緑地として、育ててゆく予定です。

●所在地 世田谷区北烏山4−43
●開園時間 午前9時〜午後5時
●公開日 毎日

地域共生のいえ「あばら屋 春夏（しゅんか）」が誕生＆訪問ツアーを開催

「自宅で家族を介護する方などが、ほっと一息ついて、気分転換できる場所を提供したい」そんなオーナーの想いから、今年3月「あばら屋 春夏」は誕生しました。これで、地域共生のいえは計11カ所となりました。7月26日(木)には、「訪問ツアー」を開催。「茶論（まろん）ONE COIN（わんこいん）」「椎（しい）の木」を訪れ、参加者に実際の活動現場に触れていただきながら、オーナー・運営協力者との交流を図りました。

世田谷まちづくりファンド 9カ所目の拠点整備が完了

多摩川河川敷（鎌田1丁目）にある、子どもたちが安心して自然と触れ合える遊び場「せたがや水辺の楽校（がっこう）はらっぱ」に、井戸、ビオトープ、かまどベンチ、可動式の日よけなどがファンドの助成を受けて整備されました。地域連携による異世代交流を育む体験学習と自然遊びの場の充実とともに、地域の防災拠点としての機能向上にも繋がっています。詳しくはhttp://semizube.exblog.jp/へ。

『世田谷の近代建築 発見ガイド』発行＆近代建築等の住み継ぎ・活用相談

当財団が平成13〜20年度にかけて行った区内近代建築の調査報告を兼ね、『世田谷の近代建築 発見ガイド』を発行しました。ご希望の方には500円（実費相当額）にてお分けしています。また、近代建築等を所有する皆様からの、保全を目的とした、修繕・改修および活用等のご相談を受け付けています。お気軽に近代建築担当までご連絡ください。

企業ボランティアと地域ボランティアの連携／緑地の保全活動を実施

5月17日（木）、6月21日（木）、8月16日（木）の3回、ゴールドマン・サックス証券社員のみなさんを迎え、毎年恒例となった成城三丁目緑地の保全活動を実施しました。ボランティアグループ「里山づくりコア会議」と共に、笹刈りと昨年の活動で植樹したクヌギやコナラの苗木周辺の整備を行いました。年々リピーターも増え、世田谷の自然に愛着を持ってくださる方が増えていくことに、喜びを噛み締める一日となりました。

まちの生きものしらべ「生きものおもしろ講演会」開催

7月14日（土）から始まった「まちの生きものしらべ」では、夏の期間、対象10種の生きものを見つけて隊員に報告してもらいます。キックオフイベント「生きものおもしろ講演会」では、虫好き女性のトップランナー鈴木海花（すずきかいか）さんをお招きし“虫目の歩き方”や小さな生きものの魅力を教えてもらいました。また「生きもの相談室」や、カブトムシ、ヤモリなどの写真、実物の展示も行い大盛況でした。

第20回「公益信託 世田谷まちづくりファンド」30グループ全てに助成決定

6月3日（日）に「公益信託 世田谷まちづくりファンド」公開審査会を開催しました。5月26日（土）に予備選考を通過した「まちを元気にする拠点づくり部門」の1グループを合わせて、今年度申請のあった30団体全てへの助成が決定しました。6月26日（火）には「まちづくり活動はじめまして交流会」を開催。過去に助成を受けた団体も参加し、活発な意見交換・交流が行われました。

ツバメのねぐら入り観察会を開催しました

軒先の巣から巣立ったツバメは秋の渡りの季節まで、河川敷のヨシ原をねぐらとし、ヨシの茎や葉にとまって眠ります。7月28日（土）、野鳥ボランティアの案内のもと、ツバメのねぐら入り観察会を行いました。年々、観察数が減っていますが、日暮れ時の多摩川で、ヨシ原を飛び回る1500羽ものツバメを観察することができました。親子の参加も多く、夏休みの思い出の一つとなったことでしょう。

学生インターンシッププログラム2012 31名の学生が参加しました

今年で5回目となるこのプログラムの特徴は、区内のまちづくり活動団体と学生との橋渡しを行い、学生が直接現場に関わることで、自ら学び成長する力を育むところです。7月10日（火）にオリエンテーションを行い、13の大学から31名の参加が決まりました。「地域共生のいえ」「ファンドグループ」「トラストボランティア団体」「まちづくりNPO法人」等、11のまちの現場で活動が行われます。

※当財団の事業については、財団ホームページでご覧いただけます。 **http://www.setagayatm.or.jp/**

他課からのお知らせ

このコーナーでは、住まいづくり課と管理課の情報をお知らせしていきます。

報告

区営住宅の「地域コミュニティサポート」事業として健康体操などを実施

住まいづくり課では、区営住宅の管理を行なっています。その一環として区営住宅自治会とまちづくりグループなどが連携し、居住者同士や地域住民とのコミュニティ促進を図るための「地域コミュニティサポート」を実施。毎年、区営住宅内集会室で、音楽会や健康体操などを開催しています。また、居住者の防災力を高めるための防災サポートとして消防訓練・防災教室も各住宅で実施しています。

今年度は健康体操を3住宅、紙芝居を1住宅、消防訓練・防災教室を21住宅で実施しました。

募集

せたがやの家 先着順入居者随時募集

せたがやの家（中堅所得のファミリー世帯向けの公的住宅）では、先着順にて随時申込みができる物件があります。世帯の所得に応じて、家賃の一部が助成され、礼金・手数料・更新料も無料となります。申込資格や物件詳細については、下記ホームページより、「せたがやの家先着順募集物件一覧」をご覧ください。詳しい内容については、下記担当までお問合せください。http://www.setagayatm.or.jp/housing/index.html
せたがやの家担当　03-6407-3302

三軒茶屋駅直結のキャロットタワー駐車場をご利用ください

財団では駐車場事業の収益を環境共生や地域共生の理念に基づくまちづくり事業などを進めるための重要な資金として活用しています。キャロットタワー地下2・3階駐車場は、最大261台を収容し、有人管理で万全のセキュリティを完備。世田谷パブリックシアターでの観劇に、お買いものに、お食事に便利です。ぜひご利用ください。
営業時間　7:00〜23:00　年中無休
駐車料金　30分／250円（早朝150円）
駐車場については下記にお問い合わせください。
キャロットパーク管理室　03-5486-2311

あなたもぜひ、トラスト会員に！

世田谷のみどりや歴史を守り育て、次世代に引き継ぐ「世田谷のトラスト運動」をささえるトラスト会員になりませんか。

会員種別と年会費

- **個人賛助会員：1年会員 1口1,000円　3年会員 1口3,000円**
- **家族賛助会員：1年会員 1口2,000円　3年会員 1口6,000円**
- **法人賛助会員：1年会員 1口10,000円　3年会員 1口30,000円**
- **子ども会員：小学校在学期間1,000円**
- **学校会員：無料** ※区内の小中学校が対象

会員特典

1 会員証発行 ※学校除く

2 情報誌「ひと・まち・自然」等の送付 ※希望者に送付します。情報誌等は財団HPからもダウンロードできます。

3 事業協力者からのサービス提供 ※詳しくは当財団までお問合せください。

提携美術館インフォメーション

トラスト会員の方は、優待制度がご利用いただけます。
提携美術館では、以下の展示が予定されています。

リニューアルオープン！ **世田谷美術館** ☎03-3415-6011	**『対話する時間―世田谷美術館コレクションによる現代美術展』** 9月15日(土)〜11月11日(日) **『生誕100年 松本竣介展』** 11月23日(金)〜2013年1月14日(月・祝) **『エドワード・スタイケン写真展』** 2013年 1月26日(土)〜4月7日(日)
世田谷文学館 ☎03-5374-9111	**『齋藤茂吉と「楡家の人びと」』展** 2012年 10月6日(土)〜12月2日(日) **『帰ってきた　寺山修司』展** 2013年 2月2日(土)〜3月31日(日)
静嘉堂文庫美術館 ☎03-3700-0007	**『静嘉堂文庫創設120周年 美術館開館20周年記念 受け継がれる東洋の至宝』** Part2　岩崎彌之助のまなざし―古典籍と明治の美術― 9月22日(土・祝)〜11月25日(日) Part3　曜変・油滴天目―茶道具名品展― 2013年 1月22日(火)〜3月24日(日)

＊展示内容など、詳細につきましては直接各施設にお問合せください。

ご寄付のお礼

2012年3月1日〜2012年8月31日までに、会員と一般寄付で、総額3,808,894円のご寄付をいただきました。どうもありがとうございます。今後も引き続きご支援の程、よろしくお願いいたします。

エコポイント環境寄付について

当財団は、国の「復興支援・住宅エコポイント事業」及び「住宅エコポイント事業」の環境寄附対象団体となり、エコポイントを利用した商品取得と同じ手続きで、ご寄附をいただくことができるようになりました。詳細については、当財団までお問合せいただくか、ホームページをご覧ください。
※家電エコポイントは、2012年3月31日をもって交換申請は終了しました。総額1,552,083円の寄付をいただきました。どうもありがとうございます。

せたがや
の
宝物

オオカマキリ

【カマキリ科】

自慢の鎌を振りかざし 弱肉強食の世界を生きる戦者

冬、枯れ野原を覗くと、乾いた茎に茶色く盛りあがった塊が点々と付着しています。この不思議な物体は、一体何なのでしょうか。

これは、卵のうというもので、オオカマキリが産み付けたものです。秋に生まれた卵の入った泡は、外側が頑丈に固まり厳しい寒さを越します。春になり、子どもたちが糸でつながり逆さまのまま数珠つなぎに卵から孵化する様子は、まるで水の流れのよう。それは、小さいスケールながらも荘厳で、圧巻です。

ところで、「蟷螂の斧」という故事成語を知っていますか？これは勝つことが土台難しい相手にも、カマキリが鎌を振りあげ強気に立ち向かう様子を表しています。つまり鎌は、カマキリの象徴ともいえるもの。指先に乗るほど小さな子どもの姿にも、小さな鎌を確認することができるはずです。彼らは卵を出たその瞬間から、命を繋ぐための道具を携え外界へと果敢に立ち向かっていくのです。

成虫となったオオカマキリは、カマキリのなかでも大型で、後羽の付け根付近に濃い斑紋があるのが特徴です。付近で動くものは何でも獲物として認識し、反射的に鎌を振りあげます。棘が列をなす大きな鎌で小動物を捉え、噛みしだく様は少し残酷に思えるかもしれません。しかしそれはすべて、彼らが生きていくために身につけている生命力の強さの証。食物連鎖が、自然界を支えているのです。すべてのものが本来あるべき姿で存在する、世田谷の自然がそんなありのままのものであり続けることを心の底から願います。

上／狩人と呼ぶにふさわしい、凛とした姿の成虫。下／卵から溢れ出る無数の小さな命。これから一人前になるため、修行の日々が続く。

ひと・まち・自然
トラまちPress Vol.9 2012年9月発行

発行／財団法人世田谷トラストまちづくり
編集／財団法人世田谷トラストまちづくり トラストまちづくり課

〒155-0031 東京都世田谷区北沢2-8-18 北沢タウンホール7階 Tel.03-6407-3311、3313 Fax.03-6407-3319
http://www.setagayatm.or.jp/

編集協力
松井編集室

取材・文
小池良実（p2～7）
大木茉莉（p10～15／p20）

イラスト
来迎純子（表紙／p8～9／p20）
南樹里（p13）

デザイン
camps

写真
佐藤隆俊（p2～7）
松井晴子（p11／p13）

©財団法人世田谷トラストまちづくり
2012 Printed in Japan
本誌掲載の写真・記事等の無断転載および複写を禁じます。

世田谷区が進める「世田谷みどり33」に連携し、みどりの保全・創出に取り組んでいます。